

国 語

注 意

1. 問題は全部で20ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 日本文学科受験者は問題四も解答すること。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答がイのとき)



4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次の文章は、著者が、磯崎憲一郎著の『肝心の子供』という小説への書評の形をとって、小説の文体のあり方について述べたものである。読んで後の問に答えよ。

小説に風景や天候が書かれていると、読者はそれを登場人物の内面の反映か場の雰囲気の反映として読み——明確にそう読まない場合でも映画の音響程度の効果を感じない読者はいない——、作者もほとんどの場合それを期待して書いてきた。

このとき、風景・天候は

a

で人物の内面や場の雰囲気が

b

ということに伝統的な小説観においてはなるわけ

だけれど、その小説観の基盤まで考えるならば、人間にとって

c

なのは内面や自分がある場の雰囲気の方で、風景や天

候こそが

d

となつてはいるはずだ。小説はこの、外界と人間との関係を表現の根拠として切り取ってきたというわけだ。

伝統的な小説観では、明確には言語化しえないにしても、風景や天候は人物の内面や場の雰囲気を説明するものとして回収される。しかし、外界と内面という二項目に分けて、

外界……風景、天候、光量、空間の密度

内面……人物の内面、場の雰囲気、出来事の質

じつに大きっぱだが、こういう風に並べてみると、外界の方が内面よりも情報量が圧倒的に多く、圧倒的に複雑であることが明らかだ。——いや、「明らか」と思わない人も多いかもしれない。人物の内面こそが最高に複雑なものであると信じている人にとっては、風景などは人物の内面を説明する以上の何物でもないだろう。その人たちは、人間の内面が複雑だからこそ風景の複雑さが発見されるのだと言ひ張るだろう。そして、間違いなく近代のある種の小説はそのような人たちによって書かれてきた。私が書いていることは「人物の内面こそが」と強く信じている人には通じないだろうが、少しでもそれに疑問や違和感を感じている人には通じるはずだ。

二分法というのはいつも雑でしかなく、ここで私がした〈外界〉〈内面〉という二分法も雑なので、枠組みの方にこだわっている
と個別事例そのものを見失う。自分自身の肉体はこの二分法では〈外界〉の方に入れられることになる。ニーチエの「われわれは
自分自身による以外には、世界への通路を持っていないのだ。」という言葉の「自分自身」もまた〈外界〉と考えるべきものかだ。
とするなら、〈内面〉とは〈言語化しうること〉で、〈外界〉とは〈言語化をこえたこと〉ということになるだろう。

風景や天候や空間を書くということは、内面を書くことではなく、内面で起こる思考や感情や感覚といった人間的な領域をは
み出して、風景そのものを思考とすることではないか。『肝心の子供』に書かれている風景とは小説の起源に立ち返って、作者が
偶然にも書いた「小説の再生」をウナガす^A何ものかなのではないかと私は思うのだ。たとえば、小説がはじまってすぐにこうい
く、だりがある。

四十日間続いた婚礼の祝典が終わると、妃はふたたび生家のある村へ帰つてしまった。新居となる城はまだ完成していな
かった。新しい宮殿のための資材や食料品や奴隷が運び込まれるのを見ながら、ブツダは毎日を過ごした。あるときどこか
らか無数の丸太が持ち込まれて、宮殿の入り口に等間隔で置かれた。すると象ほどもある、青灰色に輝く巨大な岩がはるか
向こうの地平線から現れ、奴隷たちによつて神経質なほど丁寧に丸太の上を転がされて、ブツダの前をゆつくりと通り過ぎ
て行つた。その数日後にはこんどは本物の四頭の象が歩いて行つた。朝の沐浴のための池が掘られ、川から池へ至る水路が
あらたに引かれることになった。花が植えられ、最後の仕上げとしてリスと美しい鳴き声の鳥と白い小猿が庭に放たれた。

ここを伝統的な小説観によつて、主人公ブツダの内面なり小説全体の行く末^gの隠喩として読もうとしたらわからなくな
る。いや、小説を解釈したがる人はどんな文章に出会つても暴力的に解釈を押しつけるから、精神分析でも社会学でも教訓でも
何でも持ち出してきてどんな解釈だつてしうるだろうが、そんなことは作者の意図さえもこえてこの小説が押し拓こうとしてい
る領域にとつて目をとぎすことにしかならない。私たち読者はここに描かれている光景を読みながら、自分自身でもこれまで明

確に意図したことはないがしかし動物の一員の間として大昔からしてきた思考を、自分の中(内面)でなくこの光景として遂行しているはずなのだ。

生命は生存のために最も有利な形態へと行き着く。カプトムシの角もムカデのいつばいある脚もクラゲのぶよぶよな体もセミの長い地中生活もヒマワリの大きな花も、すべて生命として生存するために行き着いた形態だ。その形態によって世界と接し、生きて子孫を残すための工夫をする。つまりその工夫こそが生命それぞれの「思考」なのだ。

たとえば、ふだんの生活の中でも、十年前に一度歩いただけの道をすっかり憶えているほどトチカンに優れている人がいるが、そのトチカンの良さがその人にとっての思考だ。モノマネが得意ならそれも思考だ。小説家が口調や考え方の真似が上手なら、それは明らかに小説を書くうえで有利な能力となるが、そういうわかりやすい次元ではない別のところで、それはその人が世界と接する能力となつていくはずだ。

私がいま強調している「思考」という言葉は狭義の「思考」とは全然違うから、人によつては「工夫」とか「能力」と言い換えた方がピンとくるかもしれない。私自身、「思考」という言葉に固執するつもりはないが、とりあえず一つの言葉を使う方が曖昧さの度合いが少ないだろうし、以前に何度も書いた記憶のある小説的思考ということとも結びつけて考えやすいだろう。

小説では表現されるすべてが思考なのだ。

行為は、原始人にとつて、むしろ思考の代理となつていくといつてよい。

という、『トータルとタブー』の末尾ちかくに書かれたフロイトの言葉(吉田正己訳)は、小説に書かれたすべてについてあてはまる。小説を読むときに読者は、誰が何をしたか、その行為がどんな結果をもたらしたか、そのプロセスで登場人物が何を考えたか感じたりしたか、というようなことに注意が集まりがちだが、それが起こる空間(場)が書かれていなければ小説にはならない。空間(場)こそが小説なのだ。『肝心の子供』にはこういう一節がある。

彼女(ヤシヨダラIIブツダの妻)にとって生活とは、個々の人格よりも一段上に置かれた、まず最初に守られるべき原理だった。いわゆる秩序というのとも違う、もつと単純に即物的で周期的な、要するに日々進行していく時間そのものだった。

こういう箇所に出会うと、読者は、「おつ、ここで作者は大事なことを言っている。」と思つて、線を引いてしまつたりするのだが、さつき引用した「四十日間続いた……」の箇所があるから、もつと言え書き出しからここに至る全部の行があるから、このくんだりの意味を持つと読者は感じる事ができる。そしてもつと言つてしまえば、さつきの引用箇所とここは同じ思考という事なのかもしれない。

同じ思考ならわざわざこんな理屈っぽいことを書かなくてもいいんじゃないか? というのは言いがかりで、この箇所があることによつて前の引用だけでなく全体が力を吹き込まれたり、輪郭が鮮明になつたりする。音楽ではシユセンリツとそれ以外の部分ではシユセンリツの部分が主^cということになるのだろうか、この小説ではこういう観念的と見えることをとどころに書くことによつて他の部分、特に風景に力が吹き込まれる。

(保坂和志『小説、世界の奏でる音楽』による)

問一

才から選り、記号をマークせよ。
 a から d の空欄には「主」か「従」かどちらかが入る。「主」「従」の組み合わせとして最適なものを次のア〜

ア	a	従	b	主	c	従	d	主
イ	a	主	b	従	c	従	d	主
ウ	a	主	b	従	c	主	d	従
エ	a	従	b	主	c	主	d	従
オ	a	主	b	従	c	主	d	主

問二 傍線部 e「人物の内面こそが」とあるが、その後に言葉を補うとすればそれは何が適當か。次のア〜オから最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア 最高に複雑なものである。

イ 近代小説の中核的テーマである。

ウ 疑問や違和感なしに理解できる。

エ 古代の小説から長く引き継がれてきた対象だ。

オ 風景の複雑さと対立するものだ。

問三 傍線部 f「自分自身」もまた「外界」と考えるべき何ものかだ」とあるが、なぜそのように言えるのか。最適なもののア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 二分法によれば、自分自身は明確に外部に存在するものとしてとらえられるから。

イ 自己の肉体は、対象物の一種であり、その意味で外界にある多くのものと同様に言語化を越えた部分があるから。

ウ ニーチェは、この著者の論理とは異なつた分類方法をとっているのでそのまま適用できないから。

エ 自分自身にとって自己は最高に複雑なものであり、ある意味で風景以上に複雑なものであるから。

オ 近代の小説にとって、自我の概念が中心的課題であり、それをもとに小説が形成されてきたため。

問四 傍線部 g「隠喩」とあるが、次の例のうち一般的な意味での「隠喩」を含む例文として最適なもののア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア トンネルを抜けるとそこは雪国だった。

イ 出た出た月が、まああるい、まああるい、まん丸い、盆のような月が。

ウ 吾輩は猫である。名前はまだない。

エ 彼はひといきでジョッキを飲み干した。

オ 彼は我が社の最後の切り札だ。

問五 傍線部h「暴力的に解釈を押しつける」とはどういうことか。最適なものをア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 読者に対して不快な解釈を強制する。

イ 荒々しい情熱をもって解釈にあたる。

ウ すべての人に当てはまるという思いこみによって解釈する。

エ 本来解釈する必要のないことでも無理矢理に解釈しようとする。

オ 著者が意識していない深層心理までも暴き出す。

問六 傍線部i「動物の一員の人間として大昔からしてきた思考を、自分の中(内面)でなくこの光景として遂行している」とある

が、著者はこの部分ではどういうことを言おうとしているのか。最適なものをア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 小説の時間的進行とともに、様々な小動物たちが出現することで、リアリティを持った表現にできること。

イ 象やリスや小鳥や猿といった動物たちが生命体としてこの風景の中に存在していること。

ウ この光景の中で周期的に進行する単調な時間的流れに、それぞれの生命の「思考」が表現されていること。

エ 精神分析や社会学や教訓を用いて分析することで新しい解釈が生まれていること。

オ 著者自身が動物たちとともにここらもとなない歩行を一步一步行っているにすぎないこと。

問七 傍線部j「小説家が口調や考え方の真似が上手なら、それは明らかに小説を書くうえで有利な能力となる」とあるがそれは

なぜか。最適なものをア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 他の人のアイデアを元に真似することで新たな創作が作りやすいから。

イ 小説のプロットを編集者などに説明するときに容易に説明ができ、わかりやすく解説できるから。

ウ 典型的な小説的思考によつてあらたな表現形式を作り出すことができるから。

エ 小説とその他の文芸作品との差を明確に意識できるため、小説家としてのアイデンティティを保ちやすいから。

オ 作中人物にそれらしい人物造形を与えることができるため、小説にリアリティを持たせることができるから。

問八 傍線部k「小説に書かれたすべてについてあてはまる」とわざわざ「すべて」と特記されているが、その理由は何か。最適なものをア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 小説の中の「登場人物の行為」だけではなく、描かれた空間もすべて広い意味での「行為」にあたるから。

イ 風景描写が原始的な感性で行われることが全体としてもっとも重要なことであるから。

ウ 風景、天候、場の雰囲気、出来事の質などすべてのものが小説にとつて重要であるから。

エ 小説に現れるカブトムシ、ムカデ、クラゲ、セミなどすべての生物が思考を行っているから。

オ 風景は観念的であるだけでなく、世界との因果関係を持った現実的な存在でもあるから。

問九 この文章が主として述べようとしていることは何か。最適なものをア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 小説における外界と内面はもっとも重要な二分法であり、これを基礎に小説が成り立っている。

イ 小説にとつて風景とは登場人物の内面の反映であり、映画の音響効果のようなものである。

ウ 思考と行為とは裏返しの関係にあり、小説においてどちらかを描写しようとするとき片面がおろそかになるものだ。

エ 小説の中の風景とはそれ自身が登場人物や作者の思考そのものであり、決して付加的なものではない。

オ 『肝心の子供』は風景の描写という点について基本的には著者の意に沿わないものだ。

問十 文章中の二重傍線部A～Cの片仮名を漢字にして、解答欄に記せ。

A ウナガす

B トチカン

C シュセンリツ

二これは、鎌倉幕府の長となつた源頼朝(大将殿が、歌人として有名な西行に偶然出会つた時のことを描写した文章である。読んで次の問に答えよ。

御館に入らせ御装束改めさせ給へば、やがて、大殿油あまた照らしかがやけたり。『今日の道行きつと、^aあてこと仰せたらぶ。』法師参れ』とて、おまし近き所の、一間なる所の、簀子に召されたり。大将殿見おこせ給ひて、昔は、^{*}はこやの山の御宮仕へせし人の、世をはかなきものにおぼししみて、身は黒くやつしたれど、月花の嘆きのほまれば、物の心なき吾妻人さへ聞き知りたるぞ。文字の数だに歌とのみ思ひしも、かう差し向かひては、もののふの負けじ心もあらずなりぬるぞ。八百日行く浜の真砂の中には、玉とて拾ひ収めたらんを、語りて聞こゆべく仰せたらぶ。

いみじくかしまりて「思ひかけず、大木の御蔭に参り侍れば、いともかがやかしきにぞ。ただ夢路たどるやうに侍りて、聞こえ奉るべきことも侍らず。さとき御まなこに見あらはされ侍るこそ、いと有りがたけれ。伊勢の海、千尋の浜に降り立ち並び侍れど、かひあることも打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて学ばせ給ふとも漏り聞き奉る。

天の下、まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに、おぼし寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへおぼし知り侍る。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の声、霜枯れの浅茅がもとの虫の音、いかで取りなめて聞こゆべき。あなかしこし』と申す。

「人々あれ聞き給へ。世は捨て逃れても、頼もしき人の心ならずや。汝が遠つ親の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞こゆる。伝へたることもあるべし。かくこそとおぼししみぬることは、忘れずてぞあらむ。事、一ことにても教へ承るべく」こはますます恐れ有る御問はせなり。御物語のはてはては、つは物の道しはしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかのやせ法師にだに、物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向かひ奉りては、をこがましく、家の伝へなりなどて聞こえや奉るべき。まして、ありがたき大宮づかへをいなみ奉り、御親たちのいつくしみをさへあだなるものに、年わづかに二十五にして家を出でたるいたづらものの、弦引きひとつだに心に留めしことも侍らず。ただ一言の忘れがたきは『賞を重くし、罰を軽くせよ』と言ひしと、『任ずる者をはつかしむれば危ふし』と言ひしありがたさよ。士卒の疝を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひなすと

いへども、まことの情よりも覚え侍らず。竈かまどを減じて、人を危ふきに落とし入るるは、将帥のさかしきにて、国を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へることのあやしきまでかしくくませるを、余所よそながら見聞き奉るには、このかたの御問ひ、ゆるさせ給へ」とて、額を板敷にすりつけて申す。

君、ゑみほこらせたまひ、「口とく心さとき法師なり。こよひは月見る夜ぞ。物語は今果たしてん。人々とかはらけとりはやし、暁かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。しし猿の中に立ち交りて、歌詠めと言ふとも詠むまじ。ただ我が前にて遊べ。風冷やかなるにも、飽かず飲み、ものきたなげに食ひちらす人々は、あたたかにもこそ。この火取り、法師に参らせよ」とて、白金もて作りたる猫の形したるを、取り伝へて、「君より賜はる」とて、前に置きたり。

^h「しし猿はなほ心たけし。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師が為には、似つかはしき御賜物ぞ」とて、三度おしいただきぬ。

(『藤篋冊子』による)

(注)

* 西行のりきよ 俗名、佐藤義清。武士であつたが若くして出家し歌人として名をなした。

* たうぶ 尊敬語。「たまふ」と同じ。

* はこやの山 上皇の御所。また、上皇自身。

* 秀郷 藤原秀郷。弓の名手として知られる。

* 士卒の疔を病めるを吸ひし 将が士卒の皮膚病の膿を吸つてやつて人心を買つたという『史記』にある逸話。

* 竈を減じて、人を危ふきに落とし入るる 将が宿泊地の竈の数を減らして、兵が少ないように見せかけ、敵を欺いたといふ同じく『史記』にある逸話。

問一 傍線部 a「今日の道行きづ」とはこの文章中では何を例えている表現か。最適なものを、次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 道中

イ 行き先

ウ 客人

エ 帰路

オ 挨拶

問二 傍線部 b「文字の数だに歌とのみ思ひしも」はここではどういう意味を表しているか。最適なものを、次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 文字の少なさにあきれた歌だと思っていたが

イ 文字が多ければそれがいいとだけ思っていたが

ウ 文字の数ではなく歌の内容によると思っていたが

エ 文字の数にこだわらず歌を作っただけだと思っていたが

オ 文字の数さえ揃っていれば和歌だという程度に思っていたが

問三 傍線部 c「大木の御蔭」とあるが、ここでは何を意味しているのか。最適なものを、次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 大きな館の中

イ 大将殿の官位

ウ あなた様のお近く

エ 西行の住居

オ 文学的な業績

問四 傍線部 d「大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の声、霜枯れの浅茅がもとの虫の音、いかで取りなめて聞こゆべき」とあるが、これはこの文の中で何を言おうとしている表現か。最適なものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選び、記号をマークせよ。

ア 頼朝の歌と西行の歌を比較して、比較にならないほど西行の歌がよいとする。

イ 頼朝の歌と西行の歌を比較して、比較にならないほど頼朝の歌がよいとする。

ウ 鳥や動物についての歌と、虫についての歌とを比較して、種類が異なるので比較できないとする。

エ 鳥や動物についての歌と、虫についての歌とを比較して、後者の方が音が聞こえたとする。

オ 自然物について詠むことは自分にとつて非常に難しいことであると謙遜する。

問五 傍線部 e「あだなるものに」の解釈として最適なものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選び、記号をマークせよ。

ア 無理と感じ

イ 重要視して

ウ 敵と思ひ

エ むだにして

オ 大切に

問六 傍線部 f「賞を重くし、罰を軽くせよ」は、『説苑』(談叢)の「明君之制賞従重罰従軽」によつてゐる。この漢文の読み下し文として適切なものを、次のア、イ、ウ、エ、オから選び、記号をマークせよ。

ア 明君の制、賞は従り重く、罰は従り軽し。

イ 明君の制、賞は重きに従ひ、罰は軽きに従ふ。

ウ 明君の制、賞従ひて重く、罰従ひて軽し。

エ 明君の制、賞重き従り、罰軽きに従ふ。

オ 明君の制、賞に従へば重く、罰に従へば軽し。

問七 傍線部g「このかたの御問ひ、ゆるさせ給へ」の解釈として最適なものを次のアから選び、記号をマークせよ。

ア 私がお訪ねすることはご遠慮させていただきます。

イ 大将殿のご訪問はなにとぞお許しください。

ウ 今回の御懸念はどうかご無用のことにお願いたします。

エ 武士の心得に関するご質問はご容赦くださいませう。

オ これまでの御恩に報いることができずお許しください。

問八 傍線部h「しし猿はなほ心たけし。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師が為には、似つかはしき御賜物ぞ」とはどういう意味の言葉か。次のアから最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア 一般の人の無骨ぶりを動物に例えて、同じように無力な自分を嘆き、悲しんだ。

イ 鹿や猿といった動物と、家畜である猫を比較して自分は猫が好きだと述べた。

ウ どうも猛な動物に比べれば、鼠を捕らない猫でも飼いやすいという形で贈り物の猫を喜んだ。

エ 野生の動物は恐いが、それに対して、猫を瘦せた法師にたとえて、おとなしいものとして形容した。

オ 東国の武士たちの武勇を誉め、もらった猫の置物にちなんだ自分を猫に例えて卑下してみせた。

問九 この『藤篋冊子』の著者は『雨月物語』の著者としても有名であるが、次のアから同じ著者の作品を一つ選び、記号をマークせよ。

ア 霧雨物語

イ 雨夜物語

ウ 春雨物語

エ 雨滴物語

オ 小雨物語

問十 西行の歌を集めた家集の名前を漢字三文字で記せ。

三 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

夏から秋へのわずかなすまを、A によつてとらえた心にくい歌である。そういう日のある朝、雨戸をあけると、そよ風によつて、どこからともなく甘い香りがただよつて来る。木犀もぎせが咲いたのだ。私は裸足のまま庭へおり、湿つた土の感触に秋が来たのを知る。

昔は金木犀と銀木犀が並んでいて、同時に花をつけたが、数年前に金のほうは枯れてしまった。枯れた年の花はみごとで、葉が見えないほどみつしりと咲いたが、あれが死花*というのであろう。銀木犀は金ほど匂いが強くはなく、花も白いので目立たないが、どちらかといえば私は銀のほうが好きである。

木犀とはいかにもごつつい名前だが、幹が動物の犀さいの肌似ているからだといい、中国伝来の植物にはさういふものが多いのである。やさしい姿の鉄線もその一つで、ほきほきした茎から出た名前だと聞くが、よろず即物的なのが中国風なのであろう。それに比べると、日本原産の八弁の鉄線を「かざぐるま」と呼ぶのは風情がある。このごろはクレマチスといった方が通りがいいが、園芸用に特別大きく作つた真つ赤な花などは気味が悪い。

鉄線もかざぐるまも春の花であるが、いったん花が終わつて秋が近づくと、またぼつりぼつりと十一月頃まで咲きつづける。花も葉も原種のように小さくなるが、かえつて盛んな時よりも、秋のうらぶれた花のほう2が趣がある。うらぶれるといえは、このころになると野も山も疲れたような感じになり、ゆつくりと、だが着実に、休息の時を迎える準備にとりかかる。生と死の間をたゆたつて3いるような、そういう寂しいような、たのしいような時間を、私はこよなく愛する。そういう静かな充実感の中で、ささやかな雑草に至るまで、最後の力をふりしぼつて懸命に咲きつづける。あざみ、ぬすびと萩、野菊、りんどう、露草その他、名も知らぬ花々を薄すすの陰に見出すのはそのころで、茗荷畑みょうがの中にはなんばんぎせるも咲く。

なんばんぎせるというと、織部おりべの陶器の煙管ませを連想するが、細い茎の先に筒状の花をつけた形は煙管に似ていなくもない。ま

た全体の雰囲気、外国の花のように見えるので、南蛮ばやりの戦国か桃山時代にその名で呼ばれたのであろう。が、これは⁴れつきとした日本の花で、古い名前を「思ひ草」といい、『万葉集』にも詠まれている。

道の辺の尾花がしたの思ひ草今さらになど物か思はん

上の句は「思ひ草」を引き出すための B の一種で、その「思ひ草」にかけて、今さらなんで恋の思いに苦しみますようと、きつぱりあきらめようとした歌である。なんばんぎせるでは歌にも詩にもならないが、さすがにやまと詞はみやびやかで、薄や茗荷の根もとにしつとりと首を垂れ、もの思いにふけっている花の風情をよく表している。

もみじあおいも、とろろあおいも、芙蓉も、木槿も、朝顔も、夕顔も、夏から秋のはじめへかけて咲く植物には、不思議と一日花が多い。中でも夕顔は、庭で切つて、器にさすまでにもう萎れてしまふ。カメラのライトなどにはとうてい耐えられない。もみじあおいは紅、とろろあおいは黄で、ともに私の好きな花である。先年、軽井沢から移植して、毎年たくさん花をつけて楽しませてくれる。とろろあおいの根は、とろろのように粘液が多いのでその名を得たが、和紙には欠くことのできぬ原料である。こういう花は一日しか持たないため、花屋で買うことができないので、家で育てる以外にない。

木槿も「⁵槿花一日の榮」と謳われたように、榮華もしくは短命の象徴になっているが、古くは木槿のことを朝顔と称したよう

で、『万葉集』の左の歌などは、木槿の白い花が似合っているように思われる。

朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕陰にこそ咲きまさりけれ

(注) * 死花 II 枯れる間際に立派な花を咲かせること。

* 織部 II 織部焼のこと。安土桃山時代の武将、茶人である古田織部の名にちなむ。

問一 A に入る最適な三文字の語句を、前の歌の中から抜き出せ。

問二 傍線部1「そういうもの」の意味するところとして最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 気味の悪い名前を持つもの

イ 視覚的な印象に基づくもの

ウ 姿と名前とがそぐわないもの

エ 即物的な名前を持つもの

オ 動物になぞらえたもの

問三 二重傍線部「風情」の読みを平仮名で記せ。

問四 傍線部2「うらぶれた」とあるが、「うらぶれる」ということばの一般的な意味として最適なものを、次のア～オから選び、

記号をマークせよ。

ア 財産を失って気持ちがすさむこと

イ ひと息ついていること

ウ 疲労困憊していること

エ 変色していること

オ みじめにしておれていること

問五 傍線部3「たゆたっている」とあるが、「たゆたう」ということばの一般的な意味として最適なものを、次のア～オから選

び、記号をマークせよ。

ア ゆらゆら揺れている

イ 夢見心地でいる

ウ 境を曖昧にしている

エ 右往左往している

オ しっかりとつないでいる

問六 傍線部4「れつきとした」の意味として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 知らない人のない

イ 姿の美しい

ウ 単純明瞭である

エ 広く分布している

オ 由緒正しい

問七

B

に入ることはとして最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 序詞

イ 枕詞

ウ 掛詞

エ 縁語

オ 係り結び

問八 傍線部5「權花一日の栄」は漢詩文に由来することばで、たとえば次のように用いられた例がある。

「松樹千年、終二是レ朽チ／權花一日、自ラ栄ト為ス」(『白氏文集』)

この詩句の意味するところとして最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 松の樹は千年の寿命を保つが、木槿の花は一日で萎れてしまう情けない花である。

イ 松の樹は千年経つと枯れてしまい、木槿の花は一日で萎れてしまうが、なおかつその短い命に自足している。

ウ 松の樹が千年経つて枯れるのも、木槿が一日で萎れるのも、「死ぬ」という意味では同じことである。

エ 松の樹が千年経つてようやく枯れ、一方、木槿が一日で萎れるのも、結局は自然の摂理で、そうなる理由がある。

オ 松の樹が千年経つてはじめて枯れることも知らず、木槿は一日で萎れるのに栄えているような顔をしているのは愚かな

ことだ。

以下の問題は、日本文学科の受験生のみ解答すること。

四 次の文章は、光源氏が、普通つていた常陸の宮の姫君(末摘花)の邸宅の前を何年ぶりで偶然通りかかり、従者の惟光に様子を探らせる場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

卯月ばかりに、^{*}花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、^{*}対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すしそそぎてをかしきほどに、月さし出でたり。昔の御歩^アき思し出でられて、艶^{えん}なるほどの夕月夜^イに、道のほど、よろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の木立^エしげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に

A の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。

橋^{なは}にはかはりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地^{ついで}もさはらねば乱れ伏したり。「見し心地する木立かな」と思すは、はやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。例の、惟光は、かかる御忍び歩^かきに後^かねば、さぶらひけり。召し寄せて、「ここは常陸の宮ぞかしな」、「しかはべる」と聞^きこゆ。「ここにありし人はまだやながむらむ。とぶらふべきぞ、わざとものせむもところせし。かかるついでに入りて消息せよ。よくたづね寄りてをうち出でよ。人違^{たが}へしてはをこならむ」とのたまふ。

ここには、いとどながめまざるころにて、つくづくとおはしけるに、^{*}昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていとなごり悲しく思して、漏り濡れたる廂^{ひまし}の端つ方おし拭^ぬはせて、ここかしこの御座^{おまし}ひきつくるはせなどしつ、例ならず世づきたまひて、

亡き人を恋ふる袂^{ひたもと}のひまなきに荒れたる軒^{のき}のしづくさへ添ふ

も心苦しきほどになむありける。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささか人げもせず。「さればこそ、往き来の道に見入るれど、人住み

げもなきものを」と思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに見れば、格子二間ばかりあげて、簾すだれ動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづ咳せきを先にたてて、「かれは誰ぞ、何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面たまはらむ」と言ふ。「それは外ほかになむものしたまふ。されど6思し分くまじき女なむはべる」と言ふ。声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人おひびとと聞き知りたり。7

〔源氏物語〕蓬生卷による

〔注〕

*花散里 || 光源氏の愛人。

*対の上 || 光源氏の妻、紫の上。

*この宮 || 常陸の宮の邸宅。

*故宮 || 亡くなつた常陸の宮。

*侍従の君 || 常陸の宮家に仕えていた女房。この時にはすでに姫君のもとを去つてゐる。

*思し分くまじき女なむはべる || 侍従の君と同じぐらい気が利く女がおります。

問一 二重傍線部ア、エの「の」のうち、一つだけ文法的機能が異なるものがある。その記号をマークせよ。

問二 A に入ることばとして最適なもの、次のア、イ、ウ、エ、オから選び、記号をマークせよ。

ア 萩 イ 梅 ウ 桜 エ 菊 オ 藤

問三 傍線部1「いとあはれにておしとごめさせたまふ」の解釈として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア まったく心を奪われて、門を開けさせなされる。

イ とても気に入つて、一行を呼び止めようとなされる。

ウ たいそう心を打たれるが、それをしいて静めようとなされる。

エ たいへん気の毒に思つて、惟光を呼び止めなされる。

オ 実に感無量なお気持ちで、車を停めさせなされる。

問四 傍線部2「聞こゆ」の説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 語り手の、惟光に対する敬意を表す尊敬語。

イ 語り手の、光源氏に対する敬意を表す謙讓語。

ウ 惟光の、光源氏に対する敬意を表す尊敬語。

エ 惟光の、常陸の宮に対する敬意を表す謙讓語。

オ 光源氏の、常陸宮に対する敬意を表す謙讓語。

問五 傍線部3「とぶらふべきを、わざとものせむもところせし」とあるが、このことばには光源氏のどのような気持ちが表れて

いるか。最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 常陸の宮の姫君を訪れるのは久しぶりなので気恥ずかしい、という気持ち。

イ 常陸の宮の姫君を急に訪問するのは失礼だ、という気持ち。

ウ 常陸の宮の姫君を訪ねる目的でわざわざ出かけてくるのはおつくうだ、という気持ち。

エ 常陸の宮邸があまりに荒れ果てているので、中へ入るのは避けたい、という気持ち。

オ 常陸の宮邸の前を偶然通りかかったことに驚き、都の狭さを思う気持ち。

問六 傍線部4「人違へしてはをこならむ」とあるが、光源氏はどうしてこのように言ったのか。その理由として最適なものを、次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア この邸が本当に自分の知っている場所なのか自信がなかったから。

イ 姫君と同居している妹と取り違えるをやっかいだと思つたから。

ウ 別の男性と間違えられると不愉快だと思つたから。

エ 姫君が惟光のことを忘れていると困ると思つたから。

オ 今ではこの邸に別の人が住んでいるかもしれないと思つたから。

問七 傍線部5「袂たもとのひまなき」とあるが、これは「袂が に濡れて乾く暇がない」という意味である。 に入れるのに最適なことばを、漢字一文字で記せ。

問八 傍線部6「恐ろしくさへおぼゆれど」とあるが、惟光はどうしてこのように感じたのか。その理由として最適なものを、次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 月が明るいので、中から自分の姿が丸見えであると感じたから。

イ 相手が前から気づいていたことがわかり、その警戒ぶりに緊張したから。

ウ 誰も住んでいないと思つていたのに、人がいることがわかり、驚愕したから。

エ 邸宅があまりに荒廃しているので、怪しいものが棲みついていないかと思つたから。

オ 相手がどんな気持ちでいるかがわからないため、対応に困つたから。

問九 傍線部7「それは外ほかになむものしたまふ」を、指示語「それ」の内容を明確にして現代語訳せよ。

問十 この文章は、ほぼ光源氏や惟光の側から語られているが、一部分だけそうではない部分がある。その部分の最初と最後の四字を抜き出せ(句読点を含む)。

問十一 『源氏物語』に大きな影響を与えた作品を、次のア〜オから一つ選び、記号をマークせよ。

ア 伊勢物語 イ 大鏡 ウ 更級日記 エ 夜の寝覚 オ 平家物語

